

「佐賀果試三四号」の生育特性

佐賀県果樹試験場

常緑果樹研究担当

特別研究員

池田繁成

「佐賀果試三四号」は「不知火」の珠芯胚実生より選抜された新品種で、母品種の「不知火」より樹勢が強く、減酸が早いことが特徴です。平成九年から苗木の導入が開始され、現在は露地栽培を中心に約四五haで栽培されています。

果樹試験場では平成二〇年から関係機関の協力のもと果実品質調査や苗木の生育特性調査を実施しており、今回は試験場内の試験結果とあわせて紹介します。

品質特性

高接ぎ樹における品質特性

第一図には、中間台の異なる露地高接ぎ園における果実品質の推移を示しています。「大津四号」中間台園は「上野早生」中間台園と比較して酸度は〇・五〜一・〇%低く推移し、一二月月上旬には一・六%程度となっています。これは平成二〇年の結果ですが、平成二一年においても同様の傾向がみられました。

このように減酸程度が異なった原因としては、中間台の樹勢の相違が考えられます。「大津四号」中間台園は「上野早生」中間台園と比べて達観で葉が大きく、摘果後の夏枝の発生が良好でした。よって細根の伸長も確保されたことから順調に減酸したと思われれます。したがって着果過多や土壤過乾燥で樹勢低下させないようにすることが特性を發揮させる重要なポイントと考えられます。

苗木樹における品質特性

第二図は試験場内無加温ハ

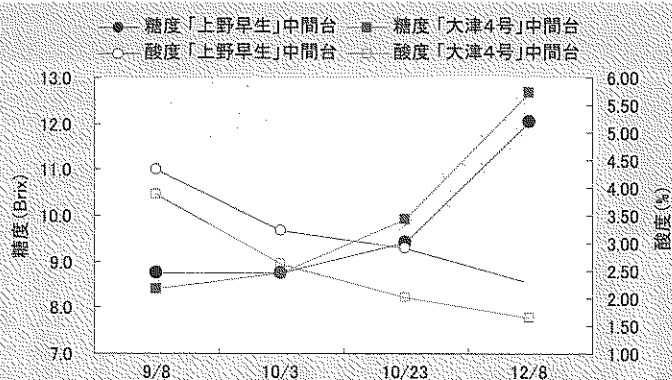
ウスでの苗木樹の果実品質の推移です。「不知火」と比較して「佐賀果試三四号」は九月以降の減酸が早く、収穫期まで〇・五〜〇・八%低い数値で推移しました。一方糖度は一〇月までは「不知火」が約一度高く推移したものの、一二月以降はその差は小さくなり、一月上旬には両品種とも一三度以上となりました。

果実品質（特に糖度）の推移からは、施設栽培においても「不知火」より減酸が促進される一方で、土壤水分過多となった場合には低糖度果となるこ

とも想定されます。このため
秋季以降は品質調査をもとに
したかん水管理を行い、高品
質果に仕上げることも必要と
思われます。

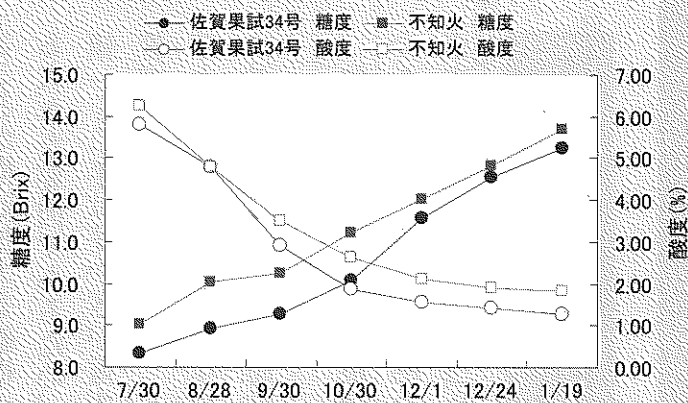
苗木の生育特性

土壌物理性と苗木の生育
苗木園については定植後の生
育が不良となりやすく、なか



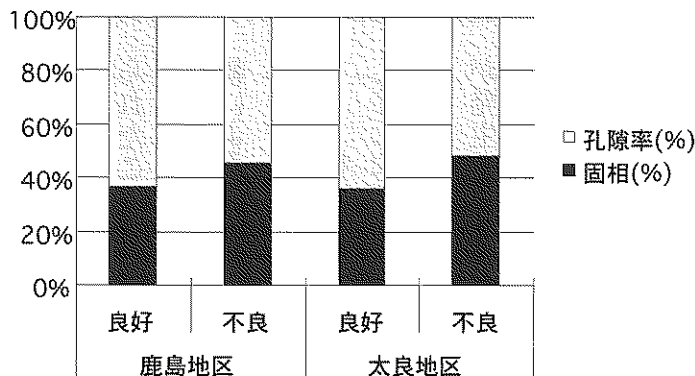
調査地：「上野早生」中間台は鹿島市、大津4号中間台は小城市

▲第1図 露地栽培における高接ぎ樹の果実品質 (H20)



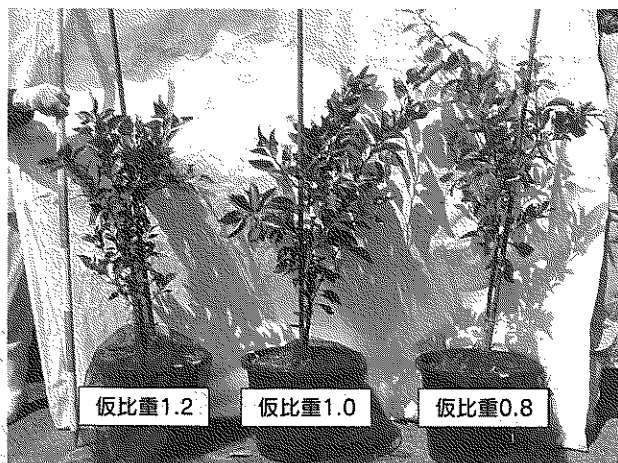
▲第2図 無加温栽培における果実品質 (H21果樹試験場)

なか樹冠拡大しないという事例
もみられています。現地園にお
いて実態調査を行った結果から
は、土壌物理性の影響が大き
いと考えられました。
第三図は鹿島・太良地区の
苗木園九ヶ所で土壌物理性の
調査結果です。一ヶ所の園地
で生育が良好な樹と不良な樹
を選定し調査しています。生
育不良樹では土壌中の空気や
水の割合を示す孔隙率が低く



▲第3図 苗木の生育と土壌物理性

なっていました。また土壌硬度
も高い傾向がみられました。
果樹試験場内では土壌の硬
さ(仮比重)を変えて栽培試
験を行っています。仮比重一
二の硬く締まった土壌に定植し
た樹では、六月に短い新梢が数
多く発生したことからの後
八月に発生した新梢の伸びも
小さくなりました。一方で仮
比重〇・八の軟らかい土壌に定
植した樹は夏梢(特に八月発
芽)の伸張が良好であり、一



▲第4図 植え付け時の土壌の硬さと活着後の生育

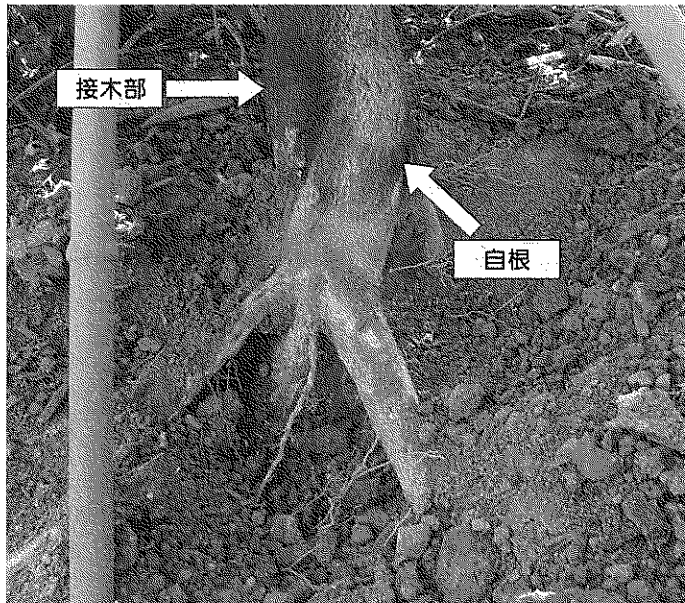
早期樹冠拡大に 有効な管理

定植時の植え穴への有機物施
用が最も効果的ですが、定植
後であっても樹の周辺にスポッ
ト的に施用し、軽く土壌と混
和することも有効と思われま
す。また、活着促進のための

年間で達観でも明確な差がわ
かる程の生育差となりました
(第一表、第四図)。

▼第1表 植え付け時の土壌の硬さと夏梢の伸張

処 理 区		6月発芽新梢			8月発芽新梢		
仮比重	(土の状態)	発芽本数	長さ(cm)	総伸長(cm)	発芽本数	長さ(cm)	総伸長(cm)
1.2区	硬く締まっている	22.0	9.8	215.3	8.7	9.8	85.3
1.0区	中間	10.0	16.0	160.0	7.7	11.2	86.0
0.8区	軟らかい	15.7	11.4	179.3	8.7	19.8	172.0

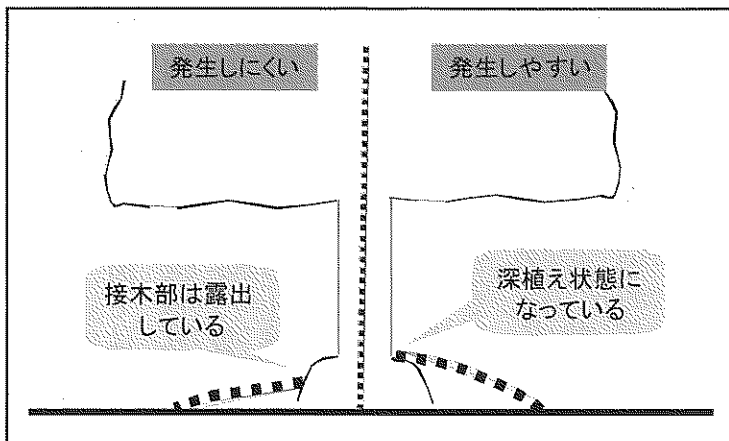


▲図5 自根の発生状況

支柱への誘引は確実に、根の分布が浅いため土壌乾燥防止の敷きワラも実施してください。

根群生育特性

次に短い新梢が繰り返し発生する。他には定植初期は細根量も少ないことから、定期的な窒素主体の葉面散布も有効です。



▲図6 自根が出にくい株元の土壌状態

調査中の苗木定植園において自根の発生が疑われる樹がみられたことから、根の組織を採取してカラタチとのDNA比較による検定を行いました。その結果二八樹調査したなかで、三樹で自根の発生を確認しました(第五図)。「不知火」、「天草」では自根が発生することが知られていますが、自根発生樹は樹勢が強盛となることから着花果が不安

定となることや低糖・低酸果となるなどの問題が指摘されています。

今回調査した結果から「佐賀果試三四号」でも発生することがわかりましたので、接木部に土壌が被らないようにして自根が発生しにくい状態としておくことが重要です(第六図)。自根の発生を確認した場合、樹体への影響を最小限に抑えるため、なるべく早期に除去する必要があります。

◇ ◇ ◇

「佐賀果試三四号」の品種特性について述べましたが、減酸が早いという最大の特徴を發揮させるには樹勢の維持・向上が最大のポイントと思われる。今後は苗木園の生産量も増加してきますが、初期生育を良好にして樹冠拡大を図ったうえで安定生産につなげる必要があると考えます。